

□書 評□

高橋 忠雄 (東京慈恵会医科大学教授) 編 集
織田 敏次 (東京大学助教授)

「肝 臓 病」

千葉大学教授

奥 田 邦 雄

今回医学書院から高橋忠雄・織田敏次両氏の編集になる「肝臓病」なる書物が出版された。この書は、序にも説明されているように 1964 年同じく医学書院から出版された「肝臓」の第 2 版に当るもので、当時の「肝臓」は同じく高橋忠雄教授らの編集になる肝臓の基礎的な面と臨床的な面の両分野を 1 冊に包含した書で、その頃のその方面の本邦の権威者の分担執筆によってでき上がったものであった。

日進月歩の肝臓病学も、 α -Feto-protein, 次いでオーストラリア抗原の発見までは、刮目するほどの進歩が見られずやや遅滞していたようにも思われたが、昨今このような免疫学的な methodology と知見の進歩と相まって、肝臓病の領域でもとみに研究が活潑となってきたことは読者とともに同慶に存ずる次第である。そのような進歩にともなって初版の内容が古くなったので、改版を基礎領域と臨床領域とに分けて分冊

して行ったということである。すなわち基礎的な分野は昨年 2 月同じく医学書院より「肝臓—構造・機能・病態生理」の第 2 版として高橋忠雄監修、三浦義彰・斎藤守・織田敏次編集で出版されたが、今回のものはそれよりも更に大きな分担執筆に成る肝臓病学の臨床を経めた書物である。執筆者は 44 名で、いずれも第一線で活躍中の専門家であり、それぞれの得意の領域を分担しておられる。

内容はまず臨床に必要なる「肝の形態」「肝の生理」「肝の生化学」の 3 基礎項目を述べた後、肝炎ウイルス、オーストラリア抗原を項を分けて取扱った後、臨床面を「症候論」「診断」「肝疾患各論」「胆嚢・胆道」「治療総論」に分けて詳しく取扱っている。

掲載されている写真、ことに顕微鏡、電顕写真の質はよく、紙質も良く、微細な変化まで読み取ることができるのは大変結構なことである。また編集者が最も苦心した点だと思

われるのは、内容に洩れがなく、しかも重複がほとんどないということである。欧米の代表的な類似書に Rouiller の書や Leon Schiff 教授の編集した「Diseases of the Liver」があり、執筆者数もほぼ同数であるが、Schiff の書では執筆者の得意な分野、範囲を主体にして、重複を避けながらだいたいの肝全分野を網羅するような努力がなされている。一方本書は内容において Schiff の書はほとんどひけをとらないのみならず、まず内容を設定して、それぞれの項目に適当な執筆者を選定したという編集方針によって内容に抜けた所がないという優れた面をもってると筆者は考えている。ともあれ、現時点における肝臓病に関する日本の最も新しい、詳しい権威書であるということは異論の余地がない。さらに慾をいえば、引用文献など論文題名を入れていない執筆者もあり、そこまでの統一がほしかったが、ともあれ、肝臓を正しく理解しようという方々には最も役立つ好著で、ぜひ座右に備えることをすすめたい。内容が優れているだけに同じ内容が英文で出版できれば、日本の肝臓病学がもっともっと高く評価されるのにと口惜しい気持がしないわけではない。

B 5・頁 956・図 205・写真 220
原色図 12 円 20,000 円 300

医学書院刊